書評

下垣仁志著『古墳時代の国家形成』

川畑　純

本書の位置と構成

日本古代史において、国家形成論は最も重要なテーマの一つである。それは、今日では特に考古学における古墳時代研究に期待される大きな課題の一つであり、国家形成を射程とした古墳時代の考古学研究が日々生み出されている。

遺構・遺物に対する「偏執的」なまでの追究と、その成果に基づく実証的な立論を得手と自負する日本考古学、特にここでは古墳時代研究に対して、ある意味で対極ともいえる立場からの国家形成論が、本書である。ただしそれは「偏執的」な分析手法を否定しない。それらを含む膨大な学史・最新研究を圧倒的な広さで猟歩し、古墳時代研究史上における普遍性を持って結実させたものが本書である。

序にあるように、本書は二〇一〇年から二〇一五年まで、著者が三十代後半のころに執筆した論考を収めたものである。著者自身も本書の構成にその間の自身の研究の進展過程を見出すように、比較的短期間に著された論考からなることで、各章が強く関連しながら一書が構成されることが本書の特長である。

第一章「古墳時代国家形成論」では、主に一九九〇年代以降の考古学による国家形成論を整理した上で、権力資源論の立場から日本における国家形成過程を論じるとする、本書での著者の立場が表明される。本書全体の構成としては「起」でありつつも「結」の役割を担うのが本章である。「イデオロギー」「経済」「軍事」「政治（領域）」といった各権力資源が、弥生時代末ごろから古墳時代にかけてどの程度コントロールされたのかを検討し、古墳時代中期前半の畿内地域を中心として国家機構が成立し、古墳時代後期中～後葉に列島広域レヴェルに支配力を及ぼす国家機構が成立したと結論付ける。

第二章「首長墓系譜論の系譜」、第三章「威信財論批判序説」では古墳時代の国家形成を考える上での個別の分析視角が提示され、詳細な分析の前提として学史と理論的背景の整理が行われる。

第二章で取り上げられるのは全国各地で盛んに研究されているテーマの一つである「首長墓系譜論」である。「首長」や「系譜」といった用語上の問題を検討し、これまでの学史の交通整理を行った後、課題の抽出とそれに対する新たな分析視角が提示される。特に鏡の保有への注目の必要性が述べられるとともに、これまで首長墓系譜の途絶や移動といった断絶面から政治的変動が議論されることの多かった首長墓系譜論について、そうした断続面だけでなく、首長墓が継続的に築造されるような継続面に注目する意義を明確化し、首長墓系譜を継続面と断続面から総合的に捉える必要性が明確化される。

第三章では「威信財」研究が取り上げられる。欧米圏及び日本における威信財研究の学史を整理し、日本では威信財の社会的意義や作用を捉えることで国家形成論や社会構造論など壮大な枠組みの構築を試みる総合化志向の枠組みが盛んに導入されてきたが、一方で授受の脈絡や保有を通じた威信の生成、反対贈与といった器物の交換の局面に焦点をあてる個別化志向の研究には消極的であったことが指摘される。その上で、総合化志向と個別化志向の双方向的検討の重要性が述べられる。

第二章、第三章を経ることで、古墳時代研究において広く受け入れられる一方で、ともすれば濫用の感すらある首長墓系譜論と威信財論の現状と課題が整理される。これにより、次章以降に具体的な分析が進められる「鏡の保有」と「首長墓系譜」に関する研究への導きが効果的になされることとなる。

第四章「鏡保有と古墳の出現」、第五章「鏡保有と首長墓系譜」では、個別の視角からの分析に着手する。権力資源論における「経済」「イデオロギー」「社会関係」（あるいは「領域」）のコントロールに関わる鏡について、威信財論の中では個別化志向の論点の一つである保有という現象を通じて、首長墓系譜を具体の検討対象として分析が進められる。

第四章では流動性を持つ各地の集団が、自身の通時的な同一性を維持・保障するために鏡を長期保有したことと、鏡の古墳への副葬とは、集団の同一性の重要な部分を被葬者とともにその地に固定することであり集団的保有の継続の一つの形であったとする解釈が提示される。鏡の伝世の開始を古墳の出現と関連付ける新たな視角が提示され、鏡の配布をコントロールしえたことが畿内中枢勢力の優勢化に拍車をかけ、国家形成に寄与したことが述べられる。

第五章では古墳被葬者の死亡年齢と鏡の製作年代の比較検討と、同一首長墓系譜内での鏡の入手―保有―副葬プロセスの検討を通じて、鏡の保有の実態が明確化される。新規に造営された「首長墓」や複数地域を統合する「盟主墓」に集団が長期保有してきた鏡が副葬される傾向を示し、鏡を長期保有していた各地の集団が、地域内で盟主的地位を得た際にその「首長」の墳墓に長期保有していた鏡を副葬したとする理解が提示される。当時の地位継承は双系的で有力集団は流動性が高かったと考えられる一方で、このように各地で鏡が長期保有され特定の「首長」の墳墓に副葬された背景として、改めて鏡の副葬が集団保有の継続の一つの形であったこと、そして鏡が集団の同一性を維持・保障する機能を担っていたとする解釈が提示される。

第六章「器物保有と国家形成」、第七章「国家形成と時空観」では、第五章までの試みについて、保有や時空観といったテーマからより先鋭化した分析が展開される。

第六章ではここまでに国家形成を論じる上での重要テーマとして明確化された鏡の保有のさらなる事例を取り上げ、「龍」の意匠が長期間にわたって保持された可能性や関東以北で古墳時代以降も継続する鏡の長期保有例の紹介を通じて、より幅広い文物の保有のあり方が論じられる。また、いくつかの説が並立する大きな論点である「政権交替論」を取り上げ、鏡の保有の継続性という観点からは政権交替論は支持できないことが主張される。

第七章では国家を考える上で重要な役割を担う有力者による時

間と空間の統御について、考古学的な分析成果と国家形成論を関連付ける試論が提示される。巨大古墳の築造や鏡の配布は領域コントロールの発露であり、鏡の長期保有が集団の通時的同一性を保証したとする本書でのこれまでの理解に対し、巨大古墳の築造と鏡の配布が空間観を形成し、継続的な首長墓の築造や鏡の長期保有が時間観を形成したとする、いわば「逆方向」からの照射が行われる。空間観や時間観という視点から、鏡の保有や首長墓系譜が国家形成に寄与した役割が改めて論じられる。

なお、第七章の後に付章として「「政権交替」論小考」が収められる。第六章でも言及された古墳時代における政権交替に関する学史を整理し、政権がいかなる集団によりいかなる統合原理で構成されているのか等、政権交替を論じるために必要不可欠な論点が未だ解決されていないこと、それらの解明が重要であることが述べられる。

あとがきにおいて、権力資源論を分析枠組として保有論と首長墓系譜論から有力集団の通時的な結節原理を追究し、国家形成論に係る著者の課題の解決を図ったのが本書であると述べられるように、本書は、権力資源論を経糸に、鏡の保有と首長墓系譜を緯糸に、古墳時代の国家形成を描き出す試みである。第一章から第三章にかけて、経糸たる権力資源論とその詳細が論じられ、第四章から第六章にかけて緯糸たる保有と首長墓系譜の分析が展開する構成は、個別に執筆された論考を集めた一書と思えぬほどに秀逸である。特に一見異質に映る第七章が、空間観・時間観という考古学研究では「馴染み」の無い視点に彩られながら、権力資源論に関わる多様な観点を経糸に、鏡と首長墓系譜のあり方を緯糸に国家形成論へと編み上げられていく様は、本書の構想を象徴した部分といえる。

本書の示すもの

こうした本書の大きな構想と構成に対し、著者が示す日本列島の国家形成のプロセスはシンプルである。およそ三から四世紀に該当する弥生時代末から古墳時代前期には、畿内地域を中心に経済やイデオロギーに係る権力資源コントロールが発達するが、やがてその重点が軍事とモニュメントに移行するなど安定性を欠くものであり、国家の成立は認めがたいとする。その後、四世紀終わりから五世紀の古墳時代中期に経済・軍事・イデオロギー・領域などの権力コントロールが有機的かつ安定的に行使されることになり、畿内地域を中心に国家と評価できる支配機構が成立したとする。ただしこれはあくまで畿内地域を中心とするもので、日本列島広域に支配力を及ぼす国家機構は六世紀の古墳時代後期のうちでも中葉から後葉にかけて成立したとする。

国家の成立時期については、考古学においては三世紀説、五世紀説、七世紀説のいわゆる七・五・三論争をはじめ多くの論が主張されているので、著者の五世紀説（正確には中期前半なので今日的な年代観からすれば四世紀を含む可能性もある）もあくまでその一つに溶け込むものである。

独特な点と言えば、五世紀における国家の成立はあくまで畿内地域における国家機構の成立であって、その支配領域は畿外の諸地域には強く及ばないとする点である。日本列島における国家の成立と日本列島広域が国家機構の支配下に組み込まれることは本

来別個の事象であるとして、両者が同一視されがちであった点を批判し、日本列島における国家機構の展開過程を描写したのである。その一方で、岡山県南部や群馬県榛名山麓地域において国家形成には至らないものの権力資源コントロールがある程度の発達をみせるとした点は、複数の指標から国家の成立を考える権力資源論の地域論への応用可能性と、畿内地域の国家形成を相対化し評価する有効性を示している。

権力資源コントロールの変遷については、前期にはイデオロギー面のコントロールが前衛化していたがやがて軍事が重視され、後期には制度面での支配機構が充実するとされるが、これはかつての「教科書的な」古墳の被葬者像である、「司祭」から「武人」、そして「官人」へというイメージを想起させる。権力資源論からの立論により理論面からの増強は著しいが、内容は意外と古典的である。著者の時に刺激的な言葉遣いや先行研究批判と比べれば少し異質なほどにその主張が理解しやすい背景には、そうした結論の馴染みやすさも一役を担っているのかもしれない。もちろん、馴染みある結論かどうかは論考としての優劣には関係なく、その立論の過程が重要なのは言うまでもない。

翻って考えれば、本書評の冒頭で記したように本書が多くの古墳時代研究に対して「ある意味で対極ともいえる立場からの国家形成論の立論」と感じさせる理由は、著者がその寄って立つ論理的立場を強く明示し論を進めることと、保有という他の器物では分析が難しい視点が前衛化しているためであることが理解される。古墳時代研究を進めるものが、本書の構成に一種の独特さを感じるのであれば（評者だけのことかもしれないが）それは自身の論理的立場の表明の弱さのために他ならないだろう。現在の古墳時代研究のあり方に対する本書の大きな問いの一つがここにある。

本書の成果と本書が明確化した課題

著者が理論的枠組みとして採用する権力資源論の是非については、書評としてここで延々展開するのも適当でないし、なにより評者の力量を超える問題である。また、著者がその枠組みを採用したこともあくまで立場の一つであって、それに対する批判もさほど生産的でない。よってここではそうした立場の中で著者が分析を進めたことによる成果と課題について述べることとする。

一つ目は、権力資源論に基づく畿内地域の動態が示されたことで、同様の枠組みによる各地域との比較検討の重要性が明確になった点である。日本列島の国家形成論、あるいは古墳時代研究においては、後の律令国家への到達が暗黙のうちに「ゴール」とされがちである。それゆえ畿内地域が主導する統一的な国家形成過程の追究が主たるテーマとされ、古墳や副葬品を通じた各地域の研究についても畿内地域との影響関係に結論が収斂されがちな点が指摘できる。

もちろん、近年は地域の独自性や受領者の立場としての分析も進められ、「周辺」の研究も活発である。そうした中で権力資源論を分析枠組として採用するならば、新たな観点から各地域の動態を理解できるだろう。

例えば、東北の太平洋側では、古墳の築造域より北でも「古墳文化」的な石製模造品を用いた祭祀が波及し導入されるが、こうした実態についてモニュメントによらずイデオロギーのコント

ロールが顕在化する地域として相対化することも重要であろう。後期の出雲東部における前方後方墳を頂点とし前方後円墳をその下位に置く古墳のヒエラルキーと特殊な装飾壺を用いた墳墓祭祀の成立は、地域内でのモニュメントとイデオロギーのコントロールの独自の発達を予見させる。地上に顕著な高塚の古墳を築造しないが多くの在地産を含む鉄製武器が副葬される九州南部の地下式横穴墓は、当該地域ではモニュメントと軍事のあり方が他地域と大きく異なる可能性を示す。

このように、権力資源論の有効性が受け入れられるならば、それは同様の視点に基づく地域論の深化にもつながりうる。それはまた中心と周辺という視点や地域間関係といった本書では低調であった分析視角から、畿内地域における権力資源コントロールの理解に再考を促し、国家形成論に関する理解をより深化させるだろう。

二つ目は、保有に関する議論の深化の必要性がより明確化した点である。古墳時代における器物の保有に関する研究を主導してきたのは鏡である。というよりも、明確に伝世や長期保有が指摘できるのがほぼ鏡に限定されるため、鏡以外の器物では保有からの立論は極めて低調にならざるを得なかったのである。もちろん、近年では玉類や一部の刀剣では伝世が明らかとなっているので、まずはそれらの器物について保有に関する研究を進めることも重要であろう。

そうした研究の進展は本書における鏡のみから器物の長期保有を考え首長墓系譜との比較検討を進めるあり方に、生産的な批判をもたらすだろう。例えば、著者も伝世の可能性を想定するとみられる、中国製の（それが故に三世紀代の輸入と時には一世紀近い伝世が想定される）小札革綴冑などが好例である。

著者は鏡について畿内地域での伝世を一部想定しつつも、基本的に伝世場所と伝世主体は各地域集団であったとする。しかし、中国製鏡と同時期に日本列島に流入してきた可能性が想定される小札革綴冑は、必ずしも各地域での伝世では理解し難い出土傾向をみせる。それはこの冑の出土一四例のうち、実に一三例が前方後円墳からの出土で（残り一例は前方後方墳）、しかもそれらの古墳の規模は九例で一〇〇mを超えるなど明らかに出土古墳の階層が上位に集中している点である。小札革綴冑のこうした非常にまとまりの強い出土傾向からすれば、伝世場所は畿内地域であって、それだけの規模の古墳を築造するような極めて限定的な特定階層の有力者に対してのみこの冑は配布されたとみる方が自然である。

他にも、同様の時期に中国から輸入された可能性が考えられる長刀については、環頭部の切り取りなどの改変が想定されている。木製装具の装着のための改変とされるが、舶載品や伝世品について鉄の本体を含め刀剣の拵えが改変される事態は器物の長期保有の意味を考える上でも重要である。鏡と他の器物では違うとする頑なな否定もありだろうし、それが翻って鏡や武器といったそれぞれの器物の社会的機能の違いを明らかにすることもありうる。しかし、鏡の保有の意味を考える上でも鏡以外の器物と合わせて古墳時代の器物の保有の実態を一貫した論理で説明しうるのかは重要な論点である。これは、鏡以外の器物の研究者に与えられた課題である。

こうした鏡以外の器物からの批判的検討は、伝世鏡の副葬を集団保有の継続と読み解く著者の解釈に対しても有効である。例えば、決して一般的ではないが、折り曲げられた刀や意図的に壊されたかのような甲冑の出土事例から、副葬行為に武威の否定や破棄を見出す解釈も提示されている。もし、副葬という行為の基底に器物の機能の否定を見出すことが可能であれば、副葬という行為に保有の継続を認める、著者の解釈にも検討が求められることになる。

また、集団的な長期保有と副葬の関係について、副葬が集団的保有の継続でありその地に固定することを企図したものならば、それは本書でも詳述される政権交替に関する解釈とも関わる問題となろう。大和から河内への巨大古墳群の移動現象とそれに関わる政権交替論について、著者が主張するように巨大古墳群の造墓主体は一貫するが、用地の領有権を発動したために造墓域を変えたとするならば、継続性を旨とする副葬行為に関する解釈との間に矛盾は生じないだろうか。

本書では新たな視角として鏡の「保有」や古墳築造の「継続」といった観点からの分析が重要であるとしているので、少なからず存在するその転変についての議論の深化を求めるのは野暮というものかもしれない。いずれにしろ、特に鏡以外の器物の検討の深化をもって、より積極的に議論していくべき課題が顕在化したことは本書の成果の一つである。

古墳時代研究における展望

首長墓系譜論は各地域における基礎的な古墳の調査研究の進展により、広さと奥行きをもった方法論として深化が図られてきた。これは、純粋な学術研究の対象としてのみならず、文化財保護の動きと地域の歴史的シンボルとして古墳に役割が求められる中で、各地で首長墓群の調査が進められてきたことを背景とする。一方で、地上に顕在化している遺跡である古墳に対して、限られたトレンチ調査により墳形を確認し出土した埴輪から年代を確定すればひとまずは首長墓系譜の研究にとって十分なデータを得る事ができる点も、人的・財政的に限られた体制下でも首長墓系譜に関する調査研究を進展せしめた理由の一つであった。地方公共団体が大きな役割を担う日本の遺跡の調査や文化財保護制度は、首長墓系譜論の進展に相性が良いのである。

一方で、遺跡の破壊と引き換えに行われる記録保存調査によって膨大な考古学的データの蓄積をもたらしてきた大規模開発事業は今や低調である。著者も指摘する首長墓系譜論における重大な課題である、古墳の造営母体とその地理的範囲の不明瞭性や古墳被葬者がその本貫地に古墳を造営したのかどうかという点については、こうした社会状況下では大きな進展は望めないだろう。本来、発掘調査という手続きにより新たな資料を獲得できるのが考古学という学問の強みであるが、未知の集落遺跡をしかも広範囲に明らかにすることは相当に難しい。社会が文化財に求めるものが相対的に増している今日、首長墓群に関する研究素材は今後も充実し続けるかもしれないが、その根幹をなす本貫地問題については顕著な進展が期待できないだろう。その中で、本書のように分析視角による問題点を明確化しその超克により首長墓系譜論の進展を図る方法は、今後ますます増えていくことが予測される。

その点でも本書は一つの研究潮流の起点となりうるだろう。

近年の古墳時代研究の顕著な動きとして、既出土の未報告資料や報告書刊行済み資料の再調査と再報告の流れがある。本書の対極にある遺構・遺物に対する「偏執的」なまでの追究がこうした動きを支えており、着実な成果を挙げている。こうした既存の資料の再検討が進めば、現状で鏡に大きく頼らざるを得ない保有に関する分析が可能な遺物もやがて増えてくるだろう。その時、場合によっては本書の保有論とは全く異なる古墳時代の器物の保有像が描かれることも十分にあり得る。

本書はそうした資料の再検討が押し進められている近年の古墳時代研究の流れとはまったく独立している。その一方で、こうした着実な遺物研究成果の蓄積により、やがて本書は乗り越えるべき一つの到達点であることが一層明確に意識されるだろう。古墳時代あるいは国家形成に関する理論派の一つの極として本書は位置づけることができるが、同じ経糸を用いたとしても、保有や首長墓系譜に関して日々着実に積み上げられている実証的な分析成果という新たな緯糸を用いれば、まったく違った国家形成論が編み上げられるかもしれない。そうした意味でも、理論派、現物派に関わらず、また古墳時代研究者に限らず広く読まれるべき一書である。

（A5判　三〇二頁　吉川弘文館、二〇一八年四月　税別六八〇〇円）

（文化庁文化財第二課文部科学技官）